# 令和4年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立加賀高等学校

| 重点目標 | | 具体的取組 | 実現状況の達成度判断基準 | 集計結果 | 分析（成果と課題） |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 ① 基本的生活習慣の確立およびスマートフォン等の使用に係るルール・モラルの啓発に努め、社会に出て通用する規範意識を育む。（スマートフォン使用の意識調査、挨拶運動の推進、服装容儀・接遇の指導、家庭との連携強化） | ① | 段階的な遅刻防止指導を取り入れ、遅刻者を減らす。特に遅刻常習者の人数を減らすことに重点を置いて指導する。 | 無遅刻日数が100日を超えるクラスが<br>A　全クラスで達成できた<br>B　５つ以上のクラスで達成できた<br>C　４つ以上のクラスで達成できた<br>D　４クラス未満の達成であった | D<br>（3ｸﾗｽ達成） | 昨年度は4クラスが達成したが、不注意から遅刻を繰り返す生徒が複数名いるクラスもあり、達成クラスは3クラスに留まった。保護者と協力しながら、根気強く個別の適切な指導を行っていく必要がある。3年生は進路決定後に遅刻が多く、卒業後を見据えた効果的な指導を行っていく。 |
| | ② | 登校時と下校時及び授業の際には大きな声で主体的に挨拶できるようにする。また、生徒会を中心とした有志の生徒を募り、生徒による挨拶運動を積極的に展開していく。 | 生徒が先手の挨拶をできるようになったと実感できる教員の割合が<br>A　85%以上である<br>B　75%以上である<br>C　65%以上である<br>D　65%未満である | C<br>（65%） | 来客から生徒の挨拶を褒めていただくことが多かったが、日々の学校生活の中で朝の挨拶や授業開始時の挨拶はまだ十分とはいえない。常にしっかりとした挨拶ができるよう習慣づけていくために手立てを考える必要がある。 |
| | ③ | 生徒会主催のいじめ撲滅キャンペーンを行い、放送等によるいじめ防止啓発活動を行うなど、いじめを見逃さない学校づくりのための対応や体制づくりの向上を図る。 | いじめを見逃さない学校づくりのために適切な取組がされていると実感できる生徒の割合が<br>A　85%以上である<br>B　75%以上である<br>C　65%以上である<br>D　65%未満である | C<br>（74%） | いじめ防止に向けたポスターづくりや言葉について考える機会を設け、未然防止に努めた。日々の観察やアンケートを年間５回実施し、早期発見、早期対応に努め、早期解決につなげることができた事案もあった。引き続き、安全安心な学校づくりのために取組を考え、実行していく。 |
| | ④ | スマートフォン等の使用に係る問題点や危険性等について、朝学習や昼休みの放送及び全校・学年集会等でモラルやマナーを理解させるとともに、家庭との連携を深めた対策を実施するため保護者にもスマートフォン等使用に関しての注意事項等の説明会を実施する。 | スマートフォン等の使用に係る問題点や危険性について理解が深まり、使用に関するモラルやマナーを守っている生徒の割合が<br>A　90%以上である<br>B　80%以上である<br>C　70%以上である<br>D　70%未満である | A<br>（95%） | SNSのトラブルは数件あったが、生徒は使用に関するモラルやマナーを守っていると認識しているようである。スマートフォン等のトラブルに巻き込まれないように、機を逃さずに、適切な使用ができるよう指導を続けていく。 |
| **学校関係者評価委員会の評価** | | | 生徒の挨拶は概ね良好である。卒業後に社会人となる生徒にとって、挨拶や基本的生活習慣の確立は最も重要であり、自分から挨拶できることの良さを生徒に浸透させたい。保護者も協力したい。 | | |
| **学校関係者評価委員会の評価をふまえた今後の改善策** | | | 挨拶について、登校指導と生徒会・有志生徒の挨拶運動を継続し、毎集会時に教員からの意識づけを行う。遅刻を繰り返す生徒には、保護者と協力しながら根気強く個別の適切な指導を行っていく。 | | |
| 2 ② あらゆる教育活動を通して、日本語4技能（読む・書く・話す・聴く）の育成を図り、授業力向上とキャリア教育の充実に努め、主体的・対話的で深い学びを推進し、専門的な技能の習得と個に応じた進路実現を目指す。またGIGAスクール構想のもと環境整備とスキル向上を目指す。（明確な「本時のねらい」、発問の工夫、アクティブ・ラーニングの推進、研究事業の充実、「総合的な探究の時間」の深化、プレゼンテーション力の育成、学び直しによる基礎学力の定着、有用な資格の取得、個人面談・個別指導の充実、個別最適な学びのための一人一台PCの活用） | ① | 授業において、ねらいや到達目標の明示、発問の工夫、アクティブ・ラーニングの推進、教員の指導スキルの向上に取り組み、主体的・対話的で深い学びにつながる授業を展開する。 | 授業を通して学力が身に付いたと実感できている生徒の割合が<br>A　90%以上である<br>B　85%以上である<br>C　80%以上である<br>D　80%未満である | A<br>（95%） | 授業での活動を重点的に評価するパフォーマンス評価において、具体的な評価基準を生徒に明示したため、積極的に授業に参加している様子が見られた。基礎学力の定着と、思考力・判断力・表現力を伸ばすための仕掛け作りに努めていく。 |
| | ② | GIGAスクール構想のもとICT環境の整備と指導スキルの向上に努め、生徒の一人一台端末を活用する場面を取り入れた授業に努める。 | 授業でICT機器を有効に使っている場面があると実感できている生徒の割合が<br>A　90%以上である<br>B　85%以上である<br>C　80%以上である<br>D　80%未満である | A<br>（93%） | 昨年度よりも2%増加した。授業での1人1台端末の使用場面が増え、端末の操作技術が向上している生徒が多くみられる。操作が苦手な生徒をフォローしつつ、生徒が自分の考えを表現できるような力を付けられる取組を考えていく。 |
| | ③ | 習熟度別や少人数制の学習指導等を通して、基礎学力の定着・向上を図るとともに、生徒全般の成績の向上につなげる。 | 外部試験において、成績上昇者の割合が<br>A　60%以上である<br>B　55%以上である<br>C　50%以上である<br>D　50%未満である | B<br>（56%） | 成績上昇者の割合が昨年度より4%増加し、1年生では6割を超えた。2年生は成績が大きく伸びた生徒も見受けられが、全体的な偏差値の上昇は、5割に留まった。成績上・中・下位層のそれぞれの生徒に合った個別最適な学びを提供し、学習意欲と学力向上に努めていく。 |
| | ④ | 日本語４技能（読む・書く・話す・聴く）の育成を図るため、生徒が自分の考えを書いたり、話したりする場面を取り入れた授業に努める。 | 授業で自分の考えを書いたり、話したりする場面があるという生徒の割合が<br>A　90%以上である<br>B　85%以上である<br>C　80%以上である<br>D　80%未満である | B<br>（85%） | 昨年度から4%減少した。1人1台端末の導入により、個人の活動が増加したことが影響している。特に3年生は昨年度までは3人に1台の端末であったため、端末の日本語入力に習熟していない生徒の割合が多かった。端末を活用して考えを他人と共有するような場面作りを推進していく。 |
| | ⑤ | 「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」をとおして、キャリア教育の充実を図る。 | 「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」の授業は自分の将来を考える上で役立っているという生徒の割合が<br>A　90%以上である<br>B　85%以上である<br>C　80%以上である<br>D　80%未満である | B<br>（89%） | コロナウィルス感染拡大防止のための自粛が、教科の魅力を大きく損なわせていたことが改めてわかった。特に3年ぶりにインターンシップを実施した2年生では、数値が大きく伸びている。一方で1年生と3年生で後期になって数値の落ち込みがあるので、行事の数と内容を改めて検討していく。 |
| | ⑥ | 一社会人として「生涯にわたって学習する」態度の基礎を育むため、資格取得への挑戦を継続させる。 | １年間に１つ以上の資格を取得した生徒の割合が<br>A　60%以上である<br>B　55%以上である<br>C　50%以上である<br>D　50%未満である | D<br>（42%） | 資格取得に挑戦した人数は変化がないが、取得できた人数が大幅に落ち込んだ。昨年の3年生と比較して今年の3年生は、合格に至らなかった割合が高かった。その中で、2年生が近年まれにみる高い数値を見せている。取得をサポートする指導方法の改善が必要である。 |
| **学校関係者評価委員会の評価** | | | 進路について、地元企業への就職が多く、今後ますます地域から期待される。ミスマッチが起きないよう日頃からの指導を充実させてほしい。 | | |
| **学校関係者評価委員会の評価をふまえた今後の改善策** | | | 各学年で行っている地域産業・地元企業や様々な業種を知るキャリア教育を改善しながら継続していく。資格取得について、生徒の学びをサポートする仕組みの改善を進めていく。 | | |

| 重点目標 | | 具体的取組 | 実現状況の達成度判断基準 | 集計結果 | 分析（成果と課題） |
|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 地域貢献活動を通して、生徒の豊かな人間性や社会性を醸成し、自己肯定感を高める。（ボランティア活動と地域交流事業の推進、体験的学習における「振り返りシート」の活用、部活動と生徒会活動の活性化） | ① 様々な背景をもつ生徒に対する理解に努め、支援できる能力の向上を目指す。 | 先生は自分のことを理解しようとしてくれているという生徒の割合が<br>A　90%以上である<br>B　80%以上である<br>C　70%以上である<br>D　70%未満である | B<br>(89%) | 生徒と教員との関係は概ね良好である。面談や個別指導の回数も昨年に比べ増加し、スクールカウンセラーとの面談回数も増えており、支援体制は充実してきている。今後も面談、授業、行事を通して生徒の理解を深め、生徒と教員の信頼関係を高める。また、教員間での情報共有を密に行い、より一層支援体制の充実を図っていく。 |
| | | ② 地域に根ざした学校として、学校全体が一体となり、地域の清掃等のボランティア活動に進んで取り組むことで、生徒の自己有用感や自己肯定感の醸成につなげる。 | 年間を通してキャリアアップ部やその他のボランティア活動に参加したことのある生徒の割合が<br>A　80%以上である<br>B　75%以上である<br>C　70%以上である<br>D　70%未満である | A<br>(86%) | ボランティア活動に参加したことのある生徒の割合が86%と昨年より10%近く増えた。キャリアアップ部（ＫＣＢ）の活動がかなり定着している。今後はＫＣＢ執行部を中心に、より地域に貢献できる活動を計画し、参加率を100%に近づけることを考えていく。 |
| | | ③ 部活動を通して生徒の活力を引き出し、自信を持たせることによって学校の活性化につなげる。 | 部活動に取り組む生徒の割合が<br>A　80%以上である<br>B　75%以上である<br>C　70%以上である<br>D　70%未満である | D<br>(65%) | 中間評価から1年生で8%、2年生で10%の低下がみられた。活動の中心となる2年生の段階で部活に取り組む生徒が減少することは課題であり、退部や休部の理由を各顧問と分析し、今後の対策を検討していく必要がある。 |
| | 学校関係者評価委員会の評価 | | 部活動は勝負よりも生徒の意欲を重視し、限られた時間・指導者の範囲で取り組んでほしい。地域移行については人材や経費面の課題があり、地域や中学校の様子を見ながら進めてはどうか。 | | |
| | 学校関係者評価委員会の評価をふまえた今後の改善策 | | 部活動について、若手教員が他部の練習に参加協力を行ったり、野球・吹奏楽・ボクシング等、人数の少ない部においては、他校との合同チームや合同練習を進めていく。 | | |
| 4 | 教育活動の成果を積極的に発信し、家庭や地域から信頼される学校づくりを推進する。（ホームページとメール配信の効果的活用、小中学校との連携強化、積極的な学校公開） | ① 教育活動に関して保護者や地域住民及び中学校の要望等に応えるため、ＰＴＡや地域に対して本校ホームページや学校メールを効果的に活用してタイムリーな情報を提供し、開かれた学校づくりを推進する。また、地域や中学校には「加賀高だより」を配布する。 | 本校のホームページやメール配信が学校の教育活動を知る上で役立っていると思っている保護者の割合が<br>A　90%以上である<br>B　85%以上である<br>C　80%以上である<br>D　80%未満である | A<br>(91%) | ホームページ（ＨＰ）や学校メールの満足度が91%と昨年よりも増えた。ＨＰは月毎の閲覧数も2万以上（多いときは4万）となった。学校メールも生徒か保護者のどちらかが必ず登録しており、ＨＰ・メールともより充実したものになるように努める。「加賀高だより」も第10号となり、図書委員を中心に、なるべく多くの生徒が関われるようしていく。 |
| | 学校関係者評価委員会の評価 | | 加賀高校のアットホームな雰囲気が良い。先生方の学校を良くしたいという思いが、生徒・保護者によく伝わっている。 | | |
| | 学校関係者評価委員会の評価をふまえた今後の改善策 | | 計画的なホームページの更新と学校メール配信を継続し、タイムリーな情報発信を行うとともに、内容についても地域・保護者の意見を取り入れながら改善していく。 | | |
| 5 | 教職員のワークライフバランス及びタイムマネジメントの意識を高め、多忙化改善に向けて時間外勤務縮減に取り組み、生徒と向き合う時間を確保する。（時間外勤務の正確な実態把握と業務改善） | ① 教員一人ひとりの時間外勤務について実態を把握するとともに早めの帰宅がしやすい雰囲気を構築する。 | 時間外勤務月60時間以上の教員の割合が年間で<br>A　5%未満である<br>B　5%以上10%未満である<br>C　10%以上15%未満である<br>D　15%以上である | B<br>(6%) | ４月は年度初めの業務が多く、特定の課の教員の時間外勤務が月60時間以上となった。１２月の学校評価アンケート（教職員）では「多忙化改善に向けて工夫したり、業務改善のアイデアを提案したりするなど、働き方改革を実行している」の肯定的な回答が95%（R3 82%）であり、意識が高まってきている。今後さらに、保護者や地域の理解を得ながら、業務分担を見直すとともに平準化を図っていく。 |
| | 学校関係者評価委員会の評価 | | 教育の質を落とさずに業務を縮減することは難しい問題であるが、教職員の多忙化改善につなげるために、保護者の協力も重要である。 | | |
| | 学校関係者評価委員会の評価をふまえた今後の改善策 | | 今年度実施した行事等で成果や効果が小さかったものについては精査し、保護者・地域の理解を得ながら、業務を見直していく。 | | |